

教員のハーディネス特性とストレスに関する研究

○成廣 優
(安田女子大学)

問題と目的

近年、教員のうつ病等の原因による退職や休職が問題となっている。文部科学省の「令和5年度公立学校教職員の人事行政状況調査について」では令和5年度に7119人もの教員が精神疾患によって休職していることが明らかとなっている。安藤・中野(2019)では、性格をはじめとする個人的要因、生徒児童とのかかわりなどの外的要因、職場の構造などの社会的要因が教員のストレスにはあると述べられている。

このような状況にも関わらず、教職を長期間続けている教員は存在する。本研究では、Kobasa(1979)の提唱したハーディネスという性格特性が、教職継続にとって重要な鍵を握るのではないかと考えた。ハーディネスとは、「高ストレス下で健康を保っている人々が持っている性格特性」と定義されている。ハーディネスは、人生の様々な状況に対して自分を十分に関与させることができる傾向である「コミットメント」、個人が出来事の推移に対してある一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、そのように行動する傾向である「コントロール」、安定性よりもむしろ変化が人生の標準であり成長の機会であるとしてとらえる傾向である「チャレンジ」という下位概念から構成される(多田・石原・濱野,2001)。本研究では現職の小・中学校の教員を対象とし、ハーディネスと仕事のやりがいや、その他の心理変数との関係性について明らかにすることを目的とした。今回は、ハーディネスとやりがい、役職との関連のみ報告する。仮説は、「ハーディネスが高いほど教員としてのやりがいが高い(仮説①)」、「校長・教頭という役職についている教員は、それ以外の教員よりも教員としてのやりがいが高い(仮説②)」とした。

方法

調査協力者:現職の教員148名(中学校教諭:127名、小学校教諭:21名)

調査手続き:Google formを用いたアンケート調査
質問項目①フェイスシート(年齢、教員歴、性別、

役職等)②ハーディネス尺度(多田・濱野(2003)を一部改変、15項目5件法)③教師のやりがい尺度(河村(2001)、24項目、4件法)④教員のストレス経験尺度(杉若・伊藤(2004)、19項目、4件法)経験頻度と嫌悪度について全19項目をそれぞれ尋ねる。⑤人生に対する肯定的評価尺度(角野(1995)、5項目、5件法)

結果・考察

仮説①に関して、ハーディネスと教師のやりがいの関連を調べるため、相関分析を実行した結果、2変数間に有意な強い正の相関があることが分かった($r = .538, p < .01$)。ハーディネスの下位因子である「コミットメント」「コントロール」「チャレンジ」と教師のやりがいとの関連を調べるため、相関分析を実行した結果、全ての間で有意な相関関係があることが分かった。「コントロール」と教師のやりがいの間には強い正の相関($r = .519, p < .01$)、「チャレンジ」と教師のやりがいの間には中程度の正の相関($r = .302, p < .01$)、「コミットメント」と教師のやりがいの間には中程度の正の相関($r = .379, p < .01$)が認められた。この結果から、ハーディネスと教師の仕事のやりがいの間には関連性があることがわかった。また、仮説②に関して「教師の役職(役職なし、学年主任、その他主任、主幹教諭、教頭、校長)」を独立変数、教師のやりがいを従属変数とした一要因分散分析を実行した結果、主効果が認められた($F(6,25.98) = 3.63, p = .01$)。下位検定の結果、校長と役職なしとの間に有意な差が認められ($p = .018$)、校長($M = 71.05, SD = 1.94$)の方が役職なし($M = 63.61, SD = 1.01$)よりやりがいを強く感じていた。

以上の結果は、性格特性以外にも当人が担当している仕事によってやりがいに影響が出ている可能性を示唆している。そのため、教員のメンタルヘルスには本人の性格特性だけではなく、本人の仕事を含める必要もあることを改めて確認できる。

主な引用文献

安藤 百恵・中野 裕史(2019).教員の方のメンタルヘルス不調の要因について 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要,51,155-161.